

賀川豊彦の思想における〈芸術としての悪〉

ステイグ・リンドバーグ

序

本論文は、独創的な宗教家であり芸術家であった賀川豊彦（一八八八—一九六〇年）の思想における「芸術としての悪」を考察するものである。筆者の分かる範囲では、賀川自身は「芸術としての悪」という言い回しは使わなかった。しかし、賀川の諸論文を精読すると、彼が悪を、少なくとも二点において芸術として考えていたことが明らかであり、そしてこの独創的な見解は賀川の進化論と目的論の相俟ったところの産物である楽観性から生まれたと考えられる。いずれにせよ、次の点は明らかである。賀川にとって、悪とは第一に人間発達方法においていわゆる「醜素役」を果たすものである。第二に、人間の思想史において悪を上手くとらえることが出来ずに来たため、それまでの形式哲学の手法を止め、代わりに、あたかも芸術家が様々な媒材や技法を用いるように悪を用いるという観点でとらえようとした。とりわけ、悪の場を備える生命は、「戯曲」だという比喩を賀川はよく用いる。

賀川豊彦の思想における〈芸術としての悪〉（リンドバーグ）

賀川にとって、「生命の一つの標準である」悪が、人間生活において具象化し身体的にも精神的にもその形姿が感じられるのである。これらが賀川のいう「苦痛」や「苦惱」であり、いわば「悪の副作用」になるわけである。しかし、このようにして「悪」が生命を構成する一つの標準というふうに考えるところが賀川の甚だしい独創的な発想であるといふべきであろう。十代に抱いた西洋的なキリスト教の影響、自分の幼児期の東洋的な育ち、それから学校で教えられた進化論——この三つが挨まった結果が上述の賀川の独創的な悪理解の要因ではなからうか。芸術家の賀川にとって、芸術の極致が人間生活そのものである。そして人間生活に形を取らせるものとして悪も善き媒材であるという。ただし悪を善き媒材にできるかどうかは、「態度」と「努力」によるのである。そして態度と努力を大きく司るものは宗教あるいは信仰であると賀川が考える。したがって、本論文では、まず賀川の悪概念と宗教観を概略的に紹介した上、彼の「芸術としての悪」の観念をつぶさに分析する。最後に、賀川研究者による「賀川の思想における悪の問題」についての先行研究を祖上にのせ、筆者がそれを批評する。資料としては『賀川豊彦全集』を主なテキストとする。

「悪」は、賀川豊彦が終生追究した第一の問題であった。彼の記述によれば「悪」は自身の宇宙目的論への思索の土台であり、そして筆者の考えでは、彼のキリスト教への帰依の主たる動機でもあった。逆境の中に育った賀川が、その悲惨と精神的な重

荷からひたすら解放されることを希求したことは、容易に想像できるであろう。一個の自覚する生体を包んでいる宇宙には、「果たして整然とした目的と意匠があるのか」と少年の豊彦は自問自答したに違いない。自然界の目的論を拒むダーウィンの学説や古くから日本に深く根を張った仏教の因果説についても思索を巡らしたであろう。

また「苦」を「悪の副作用である」と特徴付ける賀川は、三十代の初め頃に、「苦の哲学」と題した論文で、「苦」という概念が、古代ギリシヤ文明の幕開けから近現代にいたるまでの間、どのように発展してきたを吟味した。その結果、賀川は「苦」を三種類に区分するのである。それは①人間の力によって解決しうる苦痛、②神の恩寵と見るべき苦難、③人力をもつては如何ともしがたい苦痛である。その中で最も耐え難いのは賀川のいう「道德悪」である。この道德悪は、いわゆる自然的災厄以上の難問である。また筆者の読解するところでは、「道德悪」は「罪と呼んでもさほど差し支えないのではないかと思う。また人間の力をもつて如何ともしがたい苦難を賀川が「宇宙悪」と呼ぶのである。上述の「悪」と「罪」との識別ないし対比が、賀川研究における重大な問題であろう。しかし本論文ではその問題を突き詰めない。ともあれ、どんな範疇の苦であれ、賀川はそれを芸術化できると考える。ただここで注意すべき一点を指摘すると、それは賀川が文献学的な言葉遣いにおいて自由奔放であるということである。武藤富男が指摘するように、賀川

が「苦」と「悪」とを混同して用いている。つまり、道德悪を「苦」と呼び、また人間の力では解決出来ない苦を「悪」と呼ぶ。

予測されうる通り、「苦の哲学」という論考を執筆した背景には、幾つかの時勢の状況が働いたと思われる。①賀川自身の、じめな人生、②啓蒙時代の産物の一つである科学の進歩、③大殺戮の第一、次世界大戦とその直後に起こった経済低迷、④ロシア革命が世界中を深刻にさせた階級闘争などがそうである。同時に、その論考の産物としては賀川自身の悪理解が確認されるであろう。もう一つ念頭に置くべきは、当時敵しく対立すると考えられていた科学と宗教との問題である。この点においては、賀川は時代にさきだつ立場をとった。つまり賀川にとっては両者は相反するものではなく、相補うものなのである。

悪を真正面から認める賀川にとって、有限世界では悪はやむをえずに起こるのである。そして不完全である人間にとっては苦難なしには成長もないという。要するに、悪は生命の内容を構成し、また進化させるといふ役割を担っているのである。多少の繰り返しになるが、筆者の考えるところでは、賀川が「悪」を結局「芸術」と考え得たのは、彼の理想主義と現実主義の相俟つた結果なのである。哲学的にいふならば、彼が帰納法と演繹法を統合させた結果である。生理的にも精神的にも、時には「警告」として、時には「酵素」として、「悪」はその「自己殿堂」に作用し、生存の擁護をするほか、精神が「無意識」から「半意識」さらに「全意識」までという過程を経るように、人間

の進化を促すという。このようにして、「警告」或いは「酵素」と表象される悪とその副作用である「苦」とは、希望を可能にする信仰（とそれに伴う辛抱と努力）と科学の「発見・発明」によって、宇宙の目的を確信した時にはじめて、「芸術」の世界への入り口となるのである。

一 悪とは何か

賀川にとつて「悪」というのは、まず「宇宙意志」あるいは「宇宙目的」——それは「絶対無限」に向かつて接近しようとすることである——に適っていない事柄なのである。この規定は人間の精神生活や行動においてはまだ分かりやすいものであるが、一方自然災害などの場合、賀川がどう考えるだろうか。自然界には、人間の持つような「良心」はないが、指向性などが内在されていると賀川は説明する。したがって、自然界を構成する無数の分子の間で、統計学上では「故障」や「ズレ」が生じざるをえないものだと『宇宙の目的』（一九五八年）で綿密に説明する。筆者にとつて興味深い問題は、いわゆる賀川のいう「自然悪・災厄」である。あくまで合目的論的な理念を抱く賀川は、自然悪をどのように解説するのだろうか。次の引用から読み取れるのは、いわば「人間悪——価値上の背き」は自然悪ないし災厄とは関係を持たないということである。「成長の立場から見て、災厄が悪から来るものとは断じて言へない。悪人が亡び

賀川豊彦の思想における「芸術としての悪」（リンダバーグ）

るといふ事は、悪だから亡ぶのではなく（中略）、内部的な亡びる性を持つ悪と、外部的な災厄を結付けるのは、未だ靈の成長せぬ時の言い分であつて、誤れるの甚だしきものである」。

ともかくも、賀川の生涯前半の第一の問題は「悪」であり、後半においてもその問題は姿を変え、宇宙の目的の属性の一つとして「悪」を捉える「生命芸術」となったのである。そうせしめたのは、賀川の若き頃からの自然界における修繕法則の発見であつたと思われる。キリスト教職者であつた賀川にとつての「悪」は、いわゆる主流キリスト教が訴えるような、「呪い」、「誘惑」、「墮落」などではなく、むしろ生命を進化たらしめる要素であつた。つまり、主流プロテスタントキリスト教に属しながらも、賀川はその流儀の悪説の核心を否定するのである。詳しくいうならば、「原罪説」を拒絶するし、また悪魔の存在をも人間の心理学的な投影による迷信だと考える。この悪に対する賀川の觀念に言及する意味は、賀川の独創的なキリスト教理解を明確するためである。つまり、教条主義のキリスト教が訴えるような、人間の罪の故に神の憤りを被るといふ命題的な教えを否定するわけである。

青年豊彦は十六歳の時から悪という問題に囚われそして悪の観点から宇宙の研究を始めるが、その時点では悪の性質はまだ謎であつた。「悪を跳ね返して進む一つの力が、其中（宇宙）にあることを発見したのである」とある。この初期の賀川における悪理解は甚だしく漠然的かつ消極的であつた。それに悪はま

た排斥すべきものでもあった。というのも、悪を破壊的なものとしか見ない以上、それを回避すべきと考える一方だからである。だが、同叙述にある「発見」という事象は、賀川の生涯で重要な役割を果たすことを忘れてはいけない。つまり、賀川の科学の探求においても、また彼の信仰生活においても、この発見は彼の悪に対する理解を次第に変貌させるのである。即ち、悪とその副作用である苦を、単なる破壊的・回避すべきものであるという見解から、今度はそれをしつかり受け止め、また「自己成長」という過程を補助してくれるものだというふうに見地を変えるのである。また賀川の場合、その信仰生活の中核になる「瞑想」（生命を内側から覗き込む）を通して、悪を処理する力が湧いてくるという。

二十一歳の賀川は、神戸のスラム街に住み着くことによつて、従来すべての不幸や罪を「宇宙悪」というふうに限定していたのを、今度は視座を拡張し、「人間悪」、「生理悪」それから「社会悪」などに悪の範疇を広げる。ここで人間悪はさしあたり道徳的な意味で使用され、そして生理悪は主に病氣などを指す。社会悪は主に人間の人格を無視する西洋列強的な重商主義を指すのである。問題なのは、この「人間悪」と「生理悪」の理解だが、当時優勢な学説であった「人種起源論」や「優種論」の発想も賀川の構想に影響を与えたのである。以上の悪の区分は専ら人為的なものであるが、予測されうる通りに、賀川は「自然悪」という範疇をも構想する。とりわけ一九二三年の関東大

震災を契機に、賀川は一月に八版を重ねた『苦難に対する態度』という論文を刊行している。ただし「自然悪」あるいは「環境悪」に関して指摘すべきは、賀川にとつてこの種の悪は本當の悪ではないということである。「環境の悪は、本質の悪ではない。宇宙の原子と、自己と一緒に考えるのは誤りである」と明言する。ここでは、筆者は賀川の悪に対する理解を分析したい。それは、賀川にとつて、悪は「実在」はしないけれども「実存」するという洞察である。

上述したように、賀川は悪の本質について次のように考える。「悪自身に亡び易い性を具備する」。おそらくここで賀川の善悪の使命はヘーゲル哲学に酷似している所があると思われる。つまり、悪がその自滅的性質によりいづれ消えてしまう一方、他方でその悪を止揚して善が必至に栄えて行くという信念に訴えている点である。ただし、この推論を出すのに、賀川はそれほどの根拠を明示していない。

あくまで合目的論的な進化論を標榜する賀川は、脳の進化につれて人間は悲哀を感じられるようになったという。そしてこの悲哀を「新しい人間苦」と命名するのである。しかし、賀川は、この「新しい人間苦」は人間性の本質ではないと考える。つまり、人間の本質を組織する「自我」或いは「我」が成長しようとすることによつて、不可避的に悲哀を覚えさせられるということである。逆にいうならば、悲哀は「自我の成長無きものには起こら無い」のである。ここに進化を可能にする「努力」

が賀川にとってどれだけ重要であるかが窺える。賀川がニーチェの哲学を見出したそれを称讃するのは、その延長線上である。更に言うならば、悲哀を感じられる人は、生の戯曲に覚醒していると賀川が考える。こうして、やがて悲哀が進化する人間の栄光に連なるのである。「かく見ることによつて、悲哀は人間苦より出発した一個の栄光であると思はざるをえないのである。私は悲劇の出生をニーチェの如く強く生きんとする人間の栄光であるとするが故に、悲哀に伴う涙の使命を重んじるものである」。

むろん、賀川にとって少なくとも人間悪は価値の上に成り立つものであるが、「道徳悪」の場合においてはそれが必ずしも一定したものではないことに注意すべきである。それは、個人個人の精神（良心）成長の具合によつてその時点においての道徳水準が異なるからである。最終の目標が同じ（統一している）なのであるから、これは「相対道徳」というより「進出道徳」というべきであろう。

悪の探究を宇宙悪という観点から始めた賀川は、上述にあるように他にも様々な視座を持ちやがて太平洋戦争の勃発の少し前あたりから宇宙に目的のあることを確信し、その上で、もう一度目的に満ちた宇宙を通して悪を理解しようとする。こうして賀川の悪に対する探究が回帰してくるが、しかし悪の責任問題とその諸特徴については、賀川の諸論述を涉獵すると、それらの描写が大幅に異なるといふことが明らかになる。さしあ

賀川豊彦の思想における「悪」の芸術としての悪（リンダーバーグ）

り、ここでその記述から抽出した定義を列記したい。①悪は実在では無い。生命の進路に横たはる淘汰の標準である。②悪は自由意志の創造的進化の上に横たはつて居るものである。③悪は生命の延びて行く上に存在する価値の上の過程である。④然し、苦痛（悪の副作用）のある生は誤謬から発生したもので無いかと考へられるのである（中略）。生あるものの受けねばならぬ宿命である。⑤罪とは一口にいへば不完全のことである。善と悪とは心の中で常に争つている。「それが人間だ、人間はどうせ不完全なんだ。不完全は決して人間自身の責任ではない」。⑥（悪は）宇宙目的に到達し得ないことから起こるのである。

鵜沼裕子は、「賀川豊彦における「悪」の問題」において、賀川の悪論を検討している。それは、限られた紙幅で総括的にまとつても丁寧な扱っているが、その中心的なテーゼは、賀川が自らの主観的な宗教体験に基づいて構想した宇宙像を、科学の諸学説でもって固めようとしている、というものである。賀川が終生、客観の科学で自分の主観的宗教体験を裏付けようとしていたのは確かであるが、鵜沼はあたかも賀川の主観的な基盤を覆すかのように、宇宙の進展を客観的な「科学的法則」の支配下に服従させようとする。つまり、宇宙を貫く物理的な法則が、主体である人間の自由度を宇宙の法則に包摂し、また奇妙な形で適合するよう強制すると賀川が考えていると解するのである。この点に関しては筆者は大きな疑問を抱く。

問題は三つである。その一つ目は、賀川にとって悪とその対応を思索するに当たり、最も重要な観点は「芸術」である。鵜沼がこの芸術という悪に対する最も重要な観点に間接的にしかふれていないのは、残念に思われる。二つ目は、前述のようないわゆるある種の「予定調和論」では、賀川のありうる話と考えた「地球の絶滅」という大規模の失敗が視野に入らない。三つ目は、賀川の宇宙の研究における出発点となる「生命」とその癖である「私」を、あくまで人格的（主観的）なものだと賀川が考えている点なのである。そして宇宙そのものの組み立ての特徴の一つが自由選択なのである。人格の持ち主である人間は、賀川の思惟によれば確かに宇宙の様々な科学的な法則の配下でありながらも、その法則に背く力を有し、また極端な場合には、その人格の力を下手に活かし地球上の生命を滅ぼす可能性も所持するという。つまり賀川にいわせるならば、人間は宇宙の進化の方向でさえ左右できるといふ。上に指摘した他にも、幾つかの疑問点があるけれど、その詳しくは註に明示してある。賀川は、人間の意識の進化（ある種の悟り）によって、絶対他者でない「神」いわゆる個別者を含めた「宇宙生命」とその意識に近寄っていくというふう²⁰に考える。否、近寄っていくどころか、賀川は、神になれると信じているからこそ「神になりたい」とまで欲求するのである。ただ留意すべきは、その「神になりたい」という願望は、絶対他者に変形するなどという意味ではなく、神である宇宙生命のように、自分も自由自在に達

し、またその可能性を社会に成し遂げるという意味である。

繰り返しになるが、賀川が自然科学の観点から宇宙を説明する論文（とりわけ「宇宙の目的」）は確かに「法則」という観念が貫いているが、他の文献を含めて考えた時には、「法則の万能性」という結論には至りにくい。幸いなことに、鵜沼は、論文の後部（「宇宙的〈秘儀〉としての悪」という項）で、この「法則の万能性」をめぐる主張を加減する。確かに、人間の歴史を巨視的に考えた時、あるいは宇宙の長い時間を通しての展開を視野においた時には、賀川の宇宙論の中の悪論がライブニッツの「予定調和論」を彷彿とさせることもある。けれども、個別者のレベルでは、その「予定調和論」が成り立たないであろう。それに、賀川自身がしばしば悪についての細部（殊にその起源や責任など）をダンテやオイケンと並んで宗教でも科学でも解き明かせない「神秘の中の神秘」であると容認するのである。最後に、些細なことではあるが、鵜沼は賀川を引用する時、必ずしもその典拠をはっきり示していないことを指摘しておきたい。

二 賀川の宗教理解

さて、宗教を通してのみ悪の変質（芸術化）は成し遂げられると賀川は考えるのであるが、まず賀川にとって「宗教」とは何かという問題を明らかにしなければならぬ。進化論的宗教

家であつた賀川の「宗教」を巡る文章は浩瀚である。おまけに、その多くは「講演筆記」という形態であるため、本文の筋道が十分に整理されていない所があると、『賀川豊彦全集』の編集長であつた武藤富男は述べている。ただ、晩年の賀川の『天の心地の心』（一九五五年）は純論文であるし、また賀川の成熟した発想が見て取れる。この論文で「宗教」というものは次の四種類に区分される。①肉体的宗教（これはいわゆる身体的な健勝を願望する営み）、②心理的宗教（これは人間の心の訓練によつての技術——字や歌——の向上を願望する営み）、③道德的宗教（これは人間の価値理解が一層深まつたところに位置し、いわゆる精神修養になるようにとか勉強が出来るようにといったことを願望する営み）、④社会宗教または宇宙的宗教（これは個人の完全だけではなく、社会あるいは全世界の人類の平和・幸福を願望する営み）。

賀川の宗教理解を敷衍するため、ここで幾つかの引用を借りて宗教の特徴を明記したい。宗教は①悪や苦痛に対する工夫である。②精神（良心、意識）の問題である。③価値の問題である。④神の心持である。⑤人生に目的があると信じていることである。⑥宇宙の再生力ならびに可能性への糸口である。⑦宇宙意志に沿つて人生目的を生きることである。これらの特徴から窺えるように、賀川にとつて宗教は告白主義的あるいは信条主義的なものというより体的かつ意識的なものである。

以上をもつて賀川の宗教理解をある程度確認したのだが、実

賀川豊彦の思想における「芸術としての悪」（リンドバーグ）

はその宗教理解に注目すべき側面がある。それは序で述べた「宗教と科学とは相補う」という点である。この典拠は賀川の文獻に散見されるが、その多くは一九二四年に発行された『愛の科学』に収録されている。賀川にとつて科学と宗教はより緊密な関係を持つていた。詳しくは次の通りである。「私の宗教は科学の天井を持つ。科学は私の為には完全なる宗教の最も大きな役目を持つ（中略）。科学によつて、私はどれほど強く、宇宙意志によつて愛されてゐるかを知る。新しき生命宗教に取つては「科学」それ自身が最も大きな慰めであり、愛である」。

賀川の宗教観で最後にふれたいのは、彼の進化論的あるいは進歩的観念の優越性である。賀川は、少しも躊躇せず「神」を「生命そのもの」であると断言する。そのうえ、「神」を「生命」と言い換えるに留まらずに、生命が進化していくと述べる文脈において神自身も進化するのではないかと暗示するのである。それゆえ、筆者は賀川が日本の最初の「プロセス神学者」ではないかと考える。賀川は、自身の宗教理解を次のように明言する。「勿論、今日になつては人類全体として成長してきたから、昔のような形で宗教を信ずる必要は好ましく無いのである（中略）。時の推移と共に信仰の内容も変わつてゆき、信仰の客体も変わつてゆく」。

三 芸術としての悪

賀川の「芸術としての悪」という観念の軸になるものは何と言つても「態度」であらう。その詳しくは「苦難に対する態度」(一九二四年)という論文に収録されているが、その要点は人生に何が投げ込まれて来たとしても、生命の万能性(修繕性を含む)を信用するということである。苦痛・苦悩の中に置かれていても、辛抱と信仰さえ持てば、暗いトンネルをくぐつて向こうに出た時には、既に一層強きものに作り替えられているという信念である。賀川は、この過程を「成長」と言い、その結果が悪および苦の超克に至ると主張する。ともかく、どんな悪や苦に直面していても「強く生きんとすること」である。この点において、前述したように賀川はニーチェの哲学を高く評価する。そして筆者の説解するところ、賀川にとっては、信仰が「発見」と密接な関係を持ち、また態度が「戯曲としての人生」と密接な関係を持つのである。これらの密接な関係の経緯が丁寧な説明を要するものであると筆者も認めるが、その説明は別な論考に回したいと思う。さしあたり態度と戯曲との相関関係については、人がその人生に必ず伴う様々な苦難をあまりに真面目に取りすぎても生きる意味を見失う恐れがある、と賀川は認めている。「生命と生存に就て正直に考へ込むのは、生そのものまでも疑いたくなる」からである。

(一) 賀川を理解する芸術

一方で、賀川にとつての芸術はあくまで価値の上に伸び上がるとうとする生命に対しての肯定でありまた構築であった。より現実的というならば、芸術は生活そのものである。「それで、真の民衆芸術とは生活芸術である。即ち凡そ生きて居るものは、何人と云へども知っておかねばならぬ、生の肯定の工夫と生の内容の充実の工夫である」。賀川は更に芸術を「死んでいる物質の芸術」と「生きている物質の芸術」に区分する。前者を絵画、建築、彫刻など、後者を音楽、舞踊、人体美および日常生活の美化と規定する。

しかし、その反面、「犠牲」といういわゆる一種の自己否定・脱構築的な理念が賀川の思想に強く根を張っている。犠牲は正にイエスの生き様であり、そしてこれが賀川の絶え間なく提唱するところでもある。その生の肯定と生の否定(自己犠牲)を橋渡しするのが賀川という「美」なのではなからうか。「私は道徳の爲めに芸術を犠牲にする勇氣を持た無い。然し美の爲の美、芸術の爲の芸術と云う分化主義、生命の袋小路を恐れるものである。私は『美の進化』を主張して、人生の目的が美しくならんとする意志にあることも嘗て述べた」。

空前のベストセラー作家であつた賀川は、幼児教育用の様々な教材やゲームを工夫するほどの芸術の才能があつた。また農業においても、いろいろな発明をした。次の引用はやや長いが賀川の芸術の理解を的確に明言するものである。

芸術家は私の芸術はあまりに宗教臭いから芸術にならぬと云ふ。それらの人々の云ふ芸術は今迄の宗教家の唱えて居た宗教と同じような意味での分化的な芸術を指して居るのである。私の芸術は科学が直に芸術になり得るような観照的心境を指して居るのである。それは生命芸術である。普通の芸術は人間の外側に美を求めんとして居るが、私の芸術は人間それ自身の中に美を要求するのである(略)。美しく生きる為めには聖くあらねばならぬ。かうして神の心持で人生の芝居を外側から眺める、それは正に人生芸術である。人生芸術を私は宗教と云ふのである。それは神の心持で眺める可べきものであるからである。こんなに考えたら生命宗教を離れて道徳も科学も芸術も無いことになる。

(二) 戯曲という芸術に包含する悪

悪とその副作用である苦を明確に認める賀川であるが、科学的な手法ではその古代からの難問を解くことはできなかった。そこで満ち溢れる自らの芸術の才能に目を向けるのである。悪や苦が、人生の最大の芸術である宗教へ導いてくれるものだと賀川は考えた。同時にカルヴァン主義の教育を受けた賀川が、その予定説の一面である「戯曲としての宇宙」、またドストエフスキイやアンリ・ベルグソンそしてテイヤール・ド・シャルダンなどの文献に出現する「戯曲と見る人生」からヒントを得たことも容易に想定される。いずれにしても、戯曲では台本があれば役者の演技もある。またその中に悲劇もある。賀川は、た

賀川豊彦の思想における「芸術としての悪」(リンダバーグ)

だ悲哀感が自我の進化過程の頂点を意味すると考えていた。また、人生のすべてが悲慘に留まるわけでもない。ここでは、賀川の幾つかの引用を「直接」並べて氏自身に語らせたと思う。「悪はそれ自身が目的ではなく、神の為さんとする所を表現する事が目的である。つまり神の劇の一役割を勤めるのである。従つて神は悪に対しても又責任を持つものである」。「然うだ、苦痛は生命の劇曲の一割当である。一役である」。

苦悩の無いものに、創造は無い。私は苦痛そのものまでも黙示として感謝しよう(略)。愛は苦痛をさへも、戯曲化してくれる(略)。然し苦痛と悪を廃除する為に、更に新しき苦痛と十字架を覚悟せねばならぬ(略)。そして結局は、苦痛の聖堂に於て、矢張り十字架の礼拝されて居る理由を、理解する。この意味に於て——否、凡ての点に於て飛躍する意味に取つては、凡てが歓喜である、戯曲である。生命は、無償で、観覧し得る大きな芝居である。苦痛さへも、死さへも感謝すべき、その一幕である。ただ、そこに、我等は、その戯曲を展開させる、宇宙と人間の意志が、愛と光明に向いて居るか、否かを点検すれば、善いのである。飛躍するものには、凡てが、戯曲である。

(三) 態度・努力としての芸術

前述したように、賀川はニーチェの「強く生きんとする」哲学を高く評価した。人間の努力は生命に内在している「延び上がるとうとする」要求だという。賀川が人間の努力を強調したこ

とは、「恵みによつてのみ」という信念を核心とする福音主義のキリスト教界から非難を招く一因になったが、それは賀川のキリスト教理解にとつては欠かせない重要点である。「非千年王国主義」(Amillennialism)の信奉者であつた賀川にとつては、神の國の実現は人間の努力・協力なしには行われなかつたのである。それゆゑ、賀川の芸術論において、人間の努力が肝心なる要素であるとされたのは当然であらう。人の心眼を組上へのせ、賀川は次のようにいう。「悪に怯えたものは、生命の力を見ずして、悪をのみ見る(略)。おまへの、刻々の努力に、悪は逃げ去るのだ(中略)。強く悪に猛襲せよ。たとひ、倒るゝことがあるとも、神が再び立たせてくれる(略)」。

また賀川の人間態度もしくは努力の重視の背後には、宇宙進化にも連関する、いわば「時間論」というべき思想が存在している。つまり、時間の経過によつてその苦しい状況がやがて過ぎ去つてゆき、そしてその体験によつて人が強められるという信念である。聖書でいうならば、ヤコブの手紙の一章の四節とペトロの手紙第一の四章の一九節の勧告に近い考えであらう。換言すれば、「明日が何をもちたらすかが分からないからこそ、辛抱をもつて頑張らうではありませんか」という観念である。賀川から直接に聞こう。

その僅かな五十年の生はスクリーンと同じ事であるを思はねばならない。決して悲観するものではない。悲観も鍊鉄と同じことで、悲観有るが故に人は鍛え上げられるものと

考へなければならぬ。悲しい時でも、信仰という柁をもつて居さへすれば、総ての悲しみ——無学、不景氣、貧乏——も総てその人を鍛え上げるものである。

四 結びに代えて

本論文では、賀川の悪概念を概観し、そして彼が芸術とみる「悪」をある程度確認してきた。芸術と科学の研究に専心していた賀川が、人間性とそれを保護する自然界をよく凝視したことが明らかであらう。ところが、考えるならば、賀川の悪に對しての対応としての態度と努力という勧告は、はたして万人に効くかという疑義が強く残る。賀川自身はその問題を深く追求せずに、論文や講義で「態度」と「努力」の大切さを訴えるに終わる。言うまでもないことだが、人々の態度と努力は様々である。それに、辛抱を要求する。いわば賀川のいう「神に俟つ」という解決方法は、物語の主人公ヨブには有効であつたかもしれないが、現実社会を生きる個人にとつては必ずしも良い結果に繋がるとは限らない。即ち法則ではない。救いを俟ちながら命を失くしてしまう場合は山ほどある。

それでも賀川は非常に積極的に悪を生命の進化の触媒として捉え、それを徹底的に肯定するのである。「神となる日、私は喜びの反対である苦痛をも造るであらう。私が神であれば、生の反対である死を創造するであらう」という。すなわち、進化の

プロセスの中にある人間にとって、死などの否定的な契機もまた、巨視的な宇宙の進化における新しい可能性を生み出すことができるのである。⁽⁹⁾

宇宙の組み立てや物質の起源などという問題は宗教の領域を超えるものだと考える賀川は、「知識によって、宇宙から神を探し出すことが出来ない時にも、生命と良心を信ずることによって、神の内在目的を信ずることが出来るのである」という。⁽¹⁰⁾この記述から再確認できることは、まず賀川にとって、苦が不可避的に混じり合っているにも拘らず結局「生命」は善きものであるということである。賀川はその他にあらゆる生物（とりわけ自己意識している人間）の成長を計算に入れていた。自己意識している人間こそが、良心という芸の媒材を通じて外部的・内部的な挫折に遭った時、逆説的により美しいものを造り出すいわば創作的な能力をもつのである。また先の項で挙げた「努力・経験論」と「戯曲論」を繋ぐ文章は次の引用で確認される。「経験することが辛いなら仕方が無いが、世界の鍵は経験しないものには解ら無いと云ふことは、強く生きるものの中にのみ生命の戯曲が啓示されると云ふことになるのである」。⁽¹¹⁾信仰と経験を唱える賀川にとって、「悪」はオペラの主人公ではなく、そのわき役にすぎないのだ。

註

(1) 武藤富男による解説である。『賀川豊彦全集』第9巻、キ

賀川豊彦の思想における〈芸術としての悪〉(リンドバーク)

リスト新聞社、一九六四年、四六九頁。

(2) 『賀川豊彦全集』第9巻、四六九頁。

(3) 「宗教は科学によって浄化し、芸術化し聖化して行くことを知らねばならぬ。科学もまた宗教によって人間の真理をわすれないで居ることが出来るのである……。科学と宗教は別個のものでは無い。それは共に生命の内容を形造るものである。科学は生命の外に宇宙の組み立てを研究し宗教は生命の衷に生命芸術を研究して如何に生かされたる実在が成長すべきかを研究するものである」(『賀川豊彦全集』第21巻、一七四頁)。更に賀川は言う。「宗教はこれからである。生命芸術はこれから進歩するのである。今迄の凡ての宗教運動は凡て序論である。宇宙の組み立てを工夫して居る科学を併合して、生命芸術は更に力強い再生の宗教を確立するであらう」(上掲書、一七四頁)。

(4) 『賀川豊彦全集』第13巻、四五三頁。

(5) 『人間苦と人間建築』を参照。

(6) 『賀川豊彦全集』第2巻、五一二、五一四頁。

(7) ただ、宇宙の究極的な目的が解らないという。『賀川豊彦全集』第13巻、四五三頁。

(8) 『賀川豊彦全集』第4巻、六〇頁。

(9) 『賀川豊彦全集』第2巻、一三八頁。

(10) 『賀川豊彦全集』第1巻、一九二頁。

(11) この思想についての転換は太平洋戦争が始まる少し前辺

りから起こったようである。そしてその契機は、賀川が巢鴨刑務所で拘留されている間「哺乳動物の骨格の進化」という書物を読んだ結果と読み取れる。『賀川豊彦全集』第13巻、二九一頁。

(12) 『賀川豊彦全集』第2巻、一二二頁。

(13) 『賀川豊彦全集』第2巻、一三八頁。

(14) 上掲書。

(15) 賀川の価値論はかなり複雑なものである。さしあたりその不変的法則は「我」に限定され、そして「我」は実在即ち価値の直観であるから、我を組織する法則は価値生活における進化そのもの、我の存在とその進化性——愛の方向をもっているもの——のほかに不変的道德は存在しないという(『賀川豊彦全集』第9巻、四七三頁)。

(16) 「太平洋戦争が始まる少し前から、私は宇宙悪の問題を宇宙目的の角度より見直し、宇宙の構造に新しい芸術的興味を感じるようになった。それで、私は、それに結論を出すことをいそがないで、宇宙の一大演出をただみておきたいと思う気がする。しかし、私が、あまりひとりりで考え込んでいることも周囲の人々にすまないで、私の宇宙の見方の一端をここに発表し、宇宙芸術の味わい方を世界の人々に知ってもらいたいと思うのである」(『賀川豊彦全集』第13巻、二九一頁)。

(17) 例えば、人間悪の責任は人間側にあると主張する一方、

他方それが神側にあると主張する。同じく、一方生命(神)が進化するといひ、他方進化しないといひ。

(18) 『賀川豊彦全集』第4巻、四七頁(傍点筆者)。

(19) 『賀川豊彦全集』第9巻、三〇頁(傍点筆者)。

(20) 『賀川豊彦全集』第4巻、六一頁。以下引用の続き。「生命そのものは悪では無い。生命の内容を創造し、生命を進化せしめんとするに当たって悪が感ぜられるのである」(傍点筆者)。

(21) 『賀川豊彦全集』第9巻、四一五頁(括弧と傍点は筆者)。

註 賀川が同じ第9巻に収録している論文に正反対に読み取れるような記述を残す。二五頁と四七二頁。

(22) 『賀川豊彦全集』第3巻、三九八頁(傍点筆者)。

(23) 『賀川豊彦全集』第13巻、四五二―四五三頁。以下引用の続き。「宇宙目的は選択組み立てによるものであるから、その選択の条件に微細な故障が起こっても、悪は発生する。微細な故障の発生することは「有限」の世界においては、避けることができない。しかし、有限の世界に組み立てが始まり、「生命」が生まれ、「生命」の奥に「精神」が出生し、「精神」が無限絶対日まで接近しようとする意欲を起したことは勇壮なものであるとせねばならない」(傍点と括弧は筆者)。

(24) 「賀川の構想する宇宙像においては、人間的な自由介在する領域のこともまた、大いなる生命体の内部に生じる現象

のひとつとして、基本的には無機的な物質世界と同一の目的論的な法則の下に置かれている(略)。(鶴沼裕子「賀川豊彦における「悪」の問題」、七三頁)。

(25) 『賀川豊彦全集』第13巻、四五〇頁。

(26) それに、人格の持つ人間の究極目的がいわゆる宇宙諸法則を突破し「自由自在・全意識」という境地に入るのである。そこまで人間を推し進めるには、宇宙の諸法則が手助けにはなるけれども、それらの法則(とりわけ科学的な法則)はあくまで生命の「乱れ」や「ズレ」(賀川のいう「悪」)という問題の射程に入らない。否、むしろ射程に入れようがない。賀川が己の宗教的世界観と科学の研究を結び付けたことは確かである。それはお互いにより緊密関係を持つところがあると思われるし、また頗る別類なものであるところもある。たとえば、賀川にとって、「科学は生命の外に宇宙の組み立てを研究し宗教は生命の衷に生命芸術を研究して如何に生かされたる実在が成長すべきかを研究するものである」(『賀川豊彦全集』第21巻、一七四頁)。病氣という苦難にしても、賀川からすればその起因が人間の「氣」にあり又その両方も同じ「氣」によるものだという。また、上述の問題点のほかにも、鶴沼の諸主張に関して多少訝る箇所がある。第一に、鶴沼は賀川の「全能者」という言い回しに言及し、賀川の神理解をバルト神学の文脈に限定しようとする。しかし、賀川の文献を幅広く精読

賀川豊彦の思想における「芸術としての悪」(リンドバーグ)

すると、賀川自身は必ずしもそういった結論は導いていない。ただし念頭に置かなければならないのは賀川が、「全能者」を「神とよんでもいい」という不確定的な、いわゆる妥協のような言い方をしていることである。賀川は甚だしく宗教的な名前に拘らない信仰者であった。全能者は自分に内在し、またいずれ同化するという観念を賀川は貫いていたといえよう。厳密にいうならば「物質なしには霊もない」という賀川を、一種の汎神論者だと捉えられなくもないと筆者は考える。賀川はまた宇宙が神の衣(皮膚)であるとも述べている。

(27) 『賀川豊彦全集』第2巻、四三九頁。

(28) 『賀川豊彦全集』第4巻、五〇一頁。

(29) 「如何なる宗教にも一つの効用がある。それは宗教の本質が苦に対する工夫であるといふ一事である。等、今日までの自然宗教にしても、人類宗教にしても、心理宗教乃至は良心宗教にしても、苛も宗教といふ宗教が凡て持つ処の通有性は、苦痛に対する工夫であることである。此工夫を考へない宗教は一つもない(略)。生理宗教、心理宗教及び良心宗教の間に道徳的、心理的の勝ちの区別はあるにしても、凡ての宗教が悪に打勝つ工夫である点に於いては一である」(『賀川豊彦全集』第2巻、一〇三—一〇四頁)。

(30) 『賀川豊彦全集』第5巻、九三頁。

(31) 『賀川豊彦全集』第2巻、五一二頁。

- (32) 『賀川豊彦全集』第3巻、三七五頁、また『日本の説教II』日本キリスト教団出版局、二〇〇六年、八四頁。
- (33) 『賀川豊彦全集』第4巻、三七八―三七九頁。
- (34) 『賀川豊彦全集』第5巻、九四頁。
- (35) 『賀川豊彦全集』第2巻、三七五頁。
- (36) 『賀川豊彦全集』第7巻、一九二頁。
- (37) 『賀川豊彦全集』第21巻、一九頁。
- (38) 『賀川豊彦全集』第4巻、四九頁。
- (39) 「我等が厭世になるか、楽天になるか、悲観するか、楽観するかは、一にかかつて我等の内的態度にある」(『賀川豊彦全集』第2巻、一三九頁)。
- (40) 『賀川豊彦全集』第2巻、一〇二頁。
- (41) 『賀川豊彦全集』第9巻、四頁。
- (42) 「略 自然界には、微妙な法則が存していることを見逃してはならない。私は生存競争の奥には、人間の測り知るべからざる神秘的塩梅が存しているやうに思はれてならないのである」(『賀川豊彦全集』第5巻、一〇二頁)。
- (43) 『賀川豊彦全集』第9巻、一六七頁。
- (44) 『賀川豊彦全集』第9巻、一六五頁。
- (45) 賀川は「美」というのを基本的に「生命の肯定」と緊密に結び付けるのだが(『賀川豊彦全集』第8巻、三二五―三二六頁)、同時に自己の利益を否定し他者の為に自己を犠牲にするという生活を称賛するのである。この犠牲的な生活
- も美しいものだ」と読み取れる。
- (46) 『賀川豊彦全集』第9巻、一六七頁(傍点論者)。
- (47) 賀川は今日の農業組合(JA)の前身を創立した他、「立体農業」という斬新の技術を構想した。
- (48) 『賀川豊彦全集』第4巻、六〇―六一頁。
- (49) 『賀川豊彦全集』第2巻、一二二頁。
- (50) 『賀川豊彦全集』第2巻、一二四頁(傍点論者)。
- (51) 『賀川豊彦全集』第2巻、一〇六頁(ルビはそのまま)。
- (52) 『賀川豊彦全集』第9巻、三頁。
- (53) これは聖書の終末論に当たる信念の一つである。つまり、キリストの再臨を視野にせず、現世で神の国を構築していく信念である。
- (54) 『賀川豊彦全集』第4巻、四七頁(傍点論者)。
- (55) 「その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります」(新改訳)。
- (56) 「ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい」(新改訳)。
- (57) 「生命の戯曲は、私に取っては、まだ始まったばかりであるのだ。それが善いか悪いか、充分生きて見ねばわからない、のだ」(『賀川豊彦全集』第4巻、五五頁)。
- (58) 『賀川豊彦全集』第2巻、三六七頁。

- (59) 『賀川豊彦全集』第2巻、九七頁。
(60) 上掲書、九七頁。
(61) 『賀川豊彦全集』第4巻、六二―六三頁。
(62) 『賀川豊彦全集』第4巻、五六頁(傍点論者)。